

コリヤークのトナカイ遊牧

大島 稔

カムチャツカ半島の生業

カムチャツカ半島の先住民コリヤークは、伝統的に北太平洋沿岸の代表的な生物資源であるサケ属魚種やアザラシ類、トドなどの海獣類、シロイルカなどの鯨類、ヒグマや野生トナカイ、シベリア・ビッグホーン、ヘラジカなどの大型陸獣を利用し、自らの生業としてきた。半島の北部では、トナカイ遊牧も重要な生業であった。さらに17世紀末以降は、ロシア帝国の植民地化が進むなかで、クロテンやアカギツネ、ラッコなどの毛皮獣狩猟が経済活動として重要になり、伝統的な野生植物採集に加えて、ジャガイモなど寒冷地に適した作物の栽培も先住民の経済活動として重要になっている。

コリヤークは、内陸に居住し、狩猟・漁労・採集の他に経済活動の中心を大規模トナカイ遊牧に置くチャウチュワン（原語chawchEvan）と、その他の海岸定住コリヤークに分けられる。海岸定住民は、ヌムルアン（原語nEmElHEn「村に住む者」）と呼ばれ、オホーツク海とベーリング海の沿岸及び河川域に居住し、漁労・海獣類・陸獣類・採集を経済活動の中心とし、小規模なトナカイ遊牧を行ってきた。

ツンドラ（凍土）で長年にわたりトナカイ遊牧を生業としてきたコリヤークは、過去も現在もトナカイ遊牧を自民族の主要な生業と見なしている。そもそもコリヤークという民族名の由来は、17世紀に初めてカムチャツカに進出したコサック兵が何度も耳にしたコーラク（qora-k「トナカイの・そばで」）という語が起源であるといわれている。

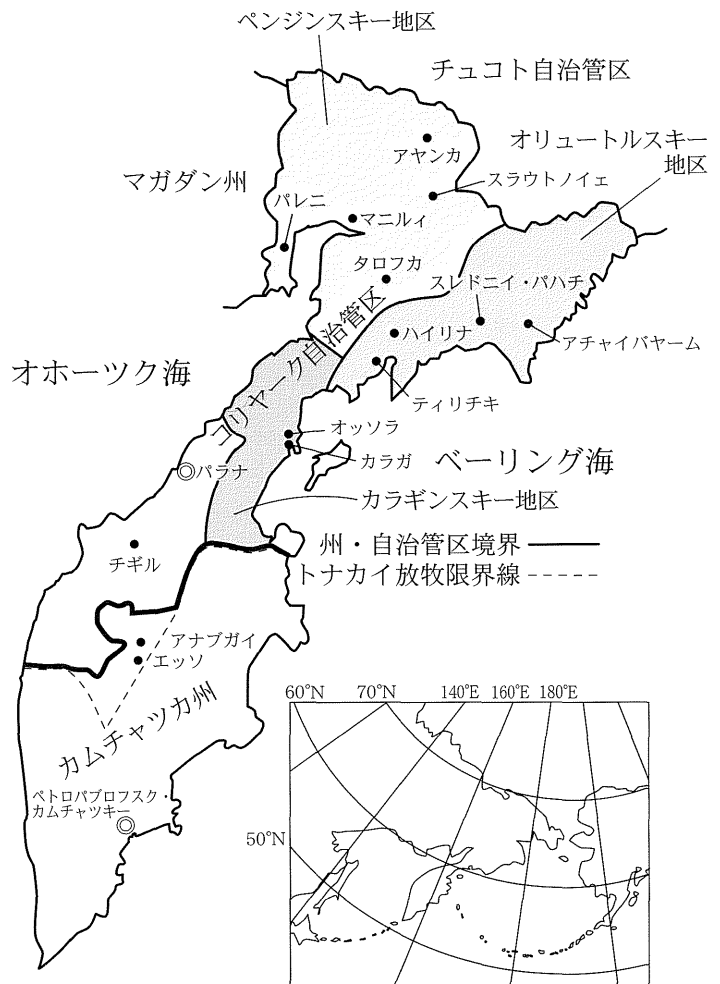
地図は、2000年現在のソフホーズ（国営農場）あるいは企業体がトナカイ遊牧を行う地域を示したものである。つまりコリヤークのトナカイ遊牧が1930年代のソビエト化と1980年代後半に始まるペレストロイカ、旧ソ連体制の崩壊で大きな変化をこうむった後の姿である。

トナカイ遊牧の歴史

1926年カムチャツカ州が成立し、1930年コリヤーク民族管区が成立することで、カムチャツカがソビエト

体制に組み込まれたとみることができる。その旧ソ連体制下において先住民の伝統生業であるトナカイ遊牧も産業化された。

ソビエト体制では、貧富の差を解消する目的があるので、トナカイ所有がその最大の標的となった。特に北部のペンジンスキー地区のコリヤークには、クラーク（klak）と呼ばれた裕福なトナカイ飼育者が多く、平均で2,000～3,000頭のトナカイを所有していた。スラウトノイエを例にとると、10,000頭のトナカイを所有する者もいた。定住させた村に村ソビエトが形成され、各成人男子50頭以下の私有を許して、コルホーズ（集団農場）に供出させられたという。個人所有トナカイが増えすぎるとまたコルホーズに没収された。しかし、トナカイの群を連れて逃げ出す者もあり、またコルホーズでのトナカイ遊牧も、あまりうまく行かなかったため、1926年にカムチャツカ全体で260,000頭以上いたというトナカイは、1935年には95,000頭まで減少している。北東部のオリュートルスキー地区やその南部のカラギンスキー地区のトナカイ飼育は小規模で、各家族の所有数



は平均して50頭以下である。しかし、やはり富裕者からトナカイを没収して、私有トナカイと合わせて飼育するコルホーズ化が行われた。たとえば、カラガでは、1930年、コリヤーク民族管区の成立と同時にトナカイ飼育がコルホーズ化され、各家族のトナカイがコルホーズに取り上げられ、個人所有としてわずかのトナカイが残されたのみで、国有トナカイと一緒に飼育して、6人の家族で毎冬自由に殺せるトナカイは2～3頭であったという。

カムチャツカでは1960年代になるとトナカイ飼育規模の拡大が始まり、各地の小規模ソフホーズが1ヵ所に集められ、拡大ソフホーズとなった。国家によるトナカイの生産計画と再生産管理はより厳しくなり、カラギンスキー地区統計局の統計にも各ソフホーズからのデータを集計した資料としてトナカイ総数だけではなく「雌(важенко)」および「初出産の雌(нетелей)」が統計の項目にあらわれる。

1986年から始まるペレストロイカ以後、政府は、それまでの手厚い保護政策をやめ、市場原理を導入したためトナカイ産業は、大きな打撃をうけた。コリヤーク民族管区はペレストロイカ期に州と同等の自治権を付与された「自治管区」に移行した。1990年のコリヤーク自治管区の頭数は150,300頭で、1頭平均27～30kgの食用肉を供給していたが、2000年の統計では、9つのソフホーズで35,500頭、7つのトナカイ飼育企業で、1,355頭に激減した。(70 лет Корякский Автономный Округ Атлас 1930-2000 : 24頁)

トナカイの遊牧形態

以下に述べるトナカイ遊牧は、主として1990年後半のスラウトノイエ、マニルイ、スレドニイ・パハチにおける情報に基づいている。

北シベリアに広がるトナカイ遊牧の中でも、コリヤークの遊牧は、森林地帯ではなくツンドラで遊牧を行い、遊牧の形態としては、どちらかといえば「粗放的」で、トナカイの世話をしたり管理することも少なく、乳を利用することもしないし、橇そりの牽引けんいんに使うが、騎乗もしない、荷駄用としての利用もわずかで、柵さく入れもしないタイプである。

遊牧の移動距離はチュクチほどではないが、他のシベリアのトナカイ牧畜民にくらべると比較的大きく、遊牧頭数も比較的多く、遊牧のタイプとしてはチュクチ・コリヤーク型としてまとめられる。

遊牧の方法は、季節に合わせて遊牧地を変え、夏の遊牧

地と冬の遊牧地がある。夏の放牧地内での移動は、徒歩で、トナカイの群とともに移動する。冬の移動は、トナカイ橇こし(後にトラクター、スノー・モービルになる)でトナカイの群とともに移動する。

春3月～4月にかけて、出産が近づくと、オスの群からメスだけを分けてキャンプ地の近くに集め、出産させる。

春の牧童の仕事は、オオカミ、キツネ、クズリ、ワタリガラスなどの捕食者から仔トナカイを守ることである。また、仔トナカイは、凍死の危険があるので、昼夜の別なく監視する。子供や老人も監視の仕事にかい出される。監視を強化しても、仔トナカイはこの時期によく死ぬ。

トナカイは、オスもメスも角を有するが、オスの枝角の方が大きくなる。春になるとトナカイのオスは闘争的になるので、枝角をつかむことは危険になる。力の強くなったオスは去勢する。去勢するのは、競技用と運搬用の橇牽引用トナカイだけである。去勢法は、睾丸を歯で砕く方法である。

7月になると冬の放牧地から夏の放牧地へ移動する。7月初めから8月末か9月初にかけて(南では、9月末から10月初まで)夏の放牧地でトナカイの群と過ごす。

夏の遊牧地は、海の近くか山の高所で、海風や気温が低いことから、どちらもトナカイにとって害虫となる蚊とブヨからトナカイを守ることができる。夏には緑が多いので草や木の葉をたべさせて栄養をたっぷり摂らせる。

夏の遊牧は、若者が中心だ。年老いた家族や子供を産む家族は、夏に河口で漁労に従事し、冬期保存用の魚の準備をする。ベリーしゅうか(漿果類)摘みも夏の大事な仕事だ。キャンプに用いるトナカイ皮テントの支柱、橇などに使う木材を集めて乾燥させる。狩猟をする暇はないので、クマや鳥などに偶然あえばそれを獲る程度だ。

秋(8月末か9月、南では9月末か10月)になると、夏の遊牧地から冬の遊牧地へ移動する途中で、定住する村の近くに戻る。

村の近くまで来た群は、2、3日の間、国有トナカイを囲い柵に入れて頭数を数え、ソフホーズのために大量の屠殺を行う。自家消費用の私有トナカイは、3、4頭屠殺するのみである。

牧童たちは、投げ縄をもってトナカイの群に入って行き、時計まわりに円を描くようにトナカイを走らせながら、捕らえるトナカイを話し合って決める。老齢や病気などで、

冬を越せないようなトナカイを優先的に選ぶ。捕らえるトナカイが群から離れるように誘導し、小さな群に分けて、ねらったトナカイの角に投げ縄をかける。トナカイと綱引きになるが、数人で引き寄せて、角をつかんで、心臓にナイフを刺す。この時に大地に血をこぼさないように気をつける。血を流さぬようにトナカイの首下の毛で傷口に栓をすることがある。血を流さないのは、トナカイと大地に示す敬意である。皮を剥ぎ、腹腔を切り開き、内臓を取り出してつぎつぎと地面に置く。胃と腸の内容物を地面に絞りだし、胸腔内に溜まった血を腸に入れて保存する。その後、角と頭骨を切り離し、内臓を腹腔に戻し、剥いだ毛皮で全体を風呂敷に包むようにまとめて縛って運ぶ。地面に残るのは、わずかな血の跡と胃と腸の内容物のみである。

初雪を合図に冬の遊牧地へ移動する。冬には、捕食者のオオカミと吹雪からトナカイを守る。吹雪になってトナカイが離散してしまい、何百頭も失うことがあるので、吹雪の前には風をよけて、谷底などに移動させる。

キャンプ地の周囲のトナカイゴケ（地衣類）を食べ尽くすと、トナカイを移動させる。1冬に4～5回キャンプ地

を移動する。移動地が決まると、まずトナカイ橇でキャンプと家族を移動してから、元の放牧地に戻り、トナカイの群を新しいキャンプ地に近くの放牧地に移動させる。

トナカイ橇には、競技用と運搬用がある。運搬用橇は、キャンプの移動などの短い距離の移動に使う。2頭牽きが多いが、荷物が重い場合には3頭牽きにすることもある。競技用橇は、儀礼の時に行うトナカイ橇の速さを競うためであるから、スピードが出るように運搬用橇よりも幅が狭く、軽く作ってある。

犬橇は、長距離の移動に使い、8頭牽きか10頭牽きで、夏のキャンプ地に保存してある干し魚などの食糧物資を冬のキャンプ地に輸送するため、あるいは他の居住地への移動に使った。ソ連時代になるとソフホーズなどでは物資の輸送手段がトラクター、スノー・モービルに変化した。ペレストロイカ以後ガソリンの高騰で犬橇が復活している。



写真1 夏のキャンプ地/マニルイ



写真2 夏の遊牧地からの移動/スレドニイ・パハチ



写真3 冬の遊牧地/スラウトノイエ

トナカイの肉も内臓もコリヤークにとっては大事な食糧であるが、伝統的に食糧をトナカイにのみ依存する事はなく、他の陸獣の肉、魚類、イチゴ類、栽培野菜、店で購入した食品などがある。毛皮は、なめして、自家用とし、衣服、容器、荷駄袋、テント住居の覆いなど様々な生活用具を製作した。国有トナカイの毛皮は、ソフホーズから政府が買い上げて買い付け商人に売る。トナカイの毛皮は、早く売らないとすぐに腐ってしまう。

春に落ちた角は、伝統手的には、橇、牽引具、投げ縄の部品やタバコ入れ、針入れ、スプーンなどの生活用具に細工して利用する。ソフホーズ時代に屠殺した角と同様、落ちた角も政府で買い入れるようになった。

トナカイの儀礼

トナカイを遊牧するコリヤークには、トナカイに関する様々な儀礼がある。定期的に行われる儀礼には、「仔トナカイ祭り」、夏の放牧地から帰って来た時の「秋の祭り」、「冬至の祭り」がある。

出産後、トナカイの角が落ちた後に行う祭りで、「へその緒」(キルヴェイ:kilvej) 祭りがある。家族ごとに祭りを行うので、1週間も続く。近隣のキャンプから客が来る。トナカイが病気にならないように、仔トナカイをたくさん産むようにという願いを込めて、テントの中で、火きり板(gichgij)、火起こし錐(milgitENEn)と弓(tiNuchHEN)とで新しい火を起こし、外でトナカイを屠殺する。人間が仔トナカイを歓迎していることを表すために、トナカイの料理を用意し、喉鳴らし歌と動物や鳥の模倣踊り、レスリング、徒競走、トナカイ橇や犬橇の競技、バスケット・ボールのようなボール・ゲーム、アザラシの皮によるブランケット・トスなどの競技を行う。

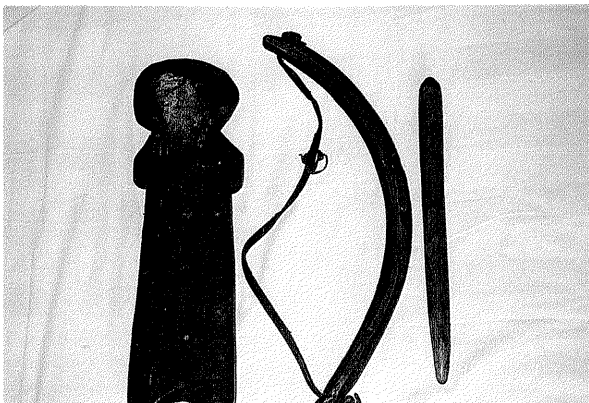


写真4 火きり板、火起こし弓と錐/マニルイ

秋のトナカイの迎え儀礼は夏の遊牧地から冬の遊牧地への移動の途中で村に戻った時に行う祭りである。トナカイの群が村に入る前に、家の火が消され、家の外で火起こし板で新しく火を起こして大きな焚き火を作る。燃えさしをトナカイの群の方になげる。トナカイを屠殺したら、火起こし板に血を塗りつけ、冬の遊牧地でのトナカイの安全を願う。

儀礼のためにトナカイを屠殺する際は、日常の屠殺に使うナイフでなく、住居の奥(入口の向いにあたる北側に位置する)に太鼓や火きり板とともに安置してある槍を使う。槍は、トナカイの左前足の脇から心臓にめがけて刺す。傷のある側の左を上にして倒れば良運、右を上にして倒れ



写真5 槍を用いた屠殺/スレドニイ・パハチ



写真6 水を飲ませる/スレドニイ・パハチ



写真7 川の神への供物/スレドニイ・パハチ

たり、前後に倒れると、運が悪いという吉凶占いもする。

トナカイが地面に倒れると傷口に毛で栓をして、頭を太陽の出る方向である東に向ける。東は死後向かう方向である。旅の途中喉が渴いてはいけないので水を飲ませるために、頭部に水をかける。解体の時には、解体者は、北側に立って解体する。

解体後、川の中に置いてある胃と腸の内容物のそばに角のついた頭骨を置き、トナカイの肉片を供物として捧げて川の神に祈る（イネルヴェトウクinelvetEk「供物を捧げて神に祈る」）。

冬至の祭りでは、屋内で火を起こし、血のスープを作り、囲炉裏の周りに、東から西へ動くように太陽の運行を真似て、南向きの入口から初めて、時計回りに左から右へと血のスープを垂らしながら回る。

外では、コリヤークにとって一番上等な白いトナカイを月に捧げる。月に向かって祈りの言葉を言う。もう1頭のトナカイを大地のための捧げる。3頭目（白くなくてもよい）を暗黒のために、西側に向いてささげる。

その他の不定期に行う儀礼には、移動中に聖山、聖石、聖地に供物を捧げる儀礼、トナカイ橇に見立てて2頭のトナカイを送る葬儀、トナカイをあの世に送る死後3年間の法要儀礼がある。結婚式にも花嫁にトナカイを贈る。

コリヤークにとってトナカイは、食糧や日常品の材料として重要なばかりではなく、通過儀礼をはじめ、トナカイをもたらした至上神と人間、あの世とこの世を結ぶという重要な役目を負っている。

（おおしま みのる／小樽商科大学）



写真8 法要の時、死者に送る再構したトナカイ／スレドニイ・パハチ

参考文献

1. Antropova, V.V. (1956, [1964]), "The Koryaks" in Levin and Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*, The University of Chicago Press, Chicago and London
 2. Jochelson, Waldemar (1908, [1975]), "The Koryak", *Jesup North Pacific Expedition* Vo.6, AMS Press, Inc. New York
 3. Корякский Автономный Округ (2000), *70 лет Корякский Автономный Округ Атлас 1930-2000*, Палана
- * 写真はすべて筆者撮影